

日本学術振興会バンコク研究連絡センター 活動報告（2013 年 10 月～12 月）



【中国・広州市で実施された中国同窓会総会にタイ同窓会長と出席】

センター長挨拶

JSPS バンコク研究連絡センターの活動報告「バンコクの風」（2013 年 10～12 月分）が発刊されましたのでお届けします。併せて、この場を借りて新年のご挨拶を申し上げます。2013 年は、JSPS 中期計画（2013-2017）の初年度にあたり、その国際戦略に基づき、また将来への「布石」を念頭に置いてセンターの運営を行いました。1）海外の学術振興機関との協議・連携、2）振興会事業の海外における実施、3）日本の大学の海外活動事業への協力・支援、4）JSPS 同窓会ネットワークの形成支援などです。具体的な内容は以下の活動報告をご覧くださいと思いますが、特記事業として、バンコクセンターが所管する地域では、タイ、バングラデシュに次いでフィリピンに同窓会が設立されたことがあげられます。論博同窓会はあったのですが、その他の JSPS 事業に参加した研究者を加えての本格的な同窓会の設立となりました。同国の JSPS カウンターパートである DOST（科学技術省）が事務局的な役割を担ってくれることになったのは、今後新しい同窓会を設立する際（予定としては、インドネシア、ベトナムなど）の先例になるのではと考えます。

タイ同窓会と中国同窓会の交流も今回の実施事業の中の大きな成果でした。昨年は中国同窓会会長がタイ訪問、今回はそのお返し形でタイ同窓会長が中国を訪問しました。

報告の中では触れておりませんが、バリ（インドネシア）で 11 月下旬に開催された AsiaHORCs（アジア学術振興機関長会議）に参加し、アジア各国の JSPS カウンターパートの代表と「顔の見える」関係が築けたのは、今後この地域で国際戦略を展開する上で大いにプラスになると思います。

本年も引き続きよろしくお願い申し上げます。

2014 年 1 月吉日

JSPS バンコク研究連絡センター長 山下邦明

主な活動と目次

10月

17日	マヒドン大学加藤さん、京都大学櫻田さんの来訪	P. 3
21日	Puthmthani 大学 Kanikar Sookasame 准教授の来訪	P. 3
22日	カセサート大学で JSPS 説明会を開催	P. 3
24日	京都大学三嶋国際担当理事の来訪	P. 4

11月

4日	京都大学バンコク連絡事務所 横山教授、中西准教授の来訪	P. 4
4日	ネパール・Pokhara 大学 Indra Tiwari 教授の来訪	P. 4
7日	在タイ日本大使館主催コンケン大学日本留学説明会に参加、コンケン大学を表敬訪問及び JSPS 説明会を実施	P. 5
16日	NRCT-JSPS Joint International Seminar on Coastal Marine Science in South East Asia へ出席	P. 6
18日	シーナカリンウィロート大学 (SWU) ウォラバン国際交流担当副学長を訪問	P. 6
18日	東京工業大学タイ拠点長 森村教授の来訪	P. 6
19日	北海道大学国際本部国際支援課亀井プログラムコーディネーターの来訪	P. 7
22日	JSPS フィリピン同窓会 (JAAP) 設立総会及び記念シンポジウムへの出席	P. 8
25日	広島大学 上 (うえ) 平和・国際担当副学長の来訪	P. 7

12月

2日	大阪大学大学院工学研究科の来訪	P. 7
4日	竹内渉 東京大学生産研准教授・前バンコクセンターセンター長の来訪	P. 9
6日	中国・広州で実施の NSFC-CAS-JSPS シンポジウム、JSPS 中国同窓会総会及び記念シンポジウムへ Busaba Yongsmith JSPS タイ同窓会長と出席	P. 10
12日	2013 年度第 4 回タイ学術会議 (NRCT) 訪問	P. 9
17日	明治大学江藤教授による講義の開催	P. 9
19日	第 12 回 JSPS タイ同窓会理事会の実施	P. 11
20日	電気通信大学の来訪	P. 11
23日	北海道大学水産科学研究院の来訪	P. 11

番外編: ロンドン・ストラスブルセンター訪問記	P. 12
-------------------------	-------

コラム#1 ダイスケさんのダイ好きアジア	P. 13
----------------------	-------

コラム#2 ブアさんのタイご案内	P. 14
------------------	-------

コラム#3 ダイスケさんのダイ好きアジア・特別編	P. 15
--------------------------	-------

■マヒドン大学加藤さん、京都大学櫻田さんの来訪（10月17日）



【左から副センター長、加藤さん、櫻田さん、センター長】

加藤さんは、マヒドン大学人権・平和研究所で、メディア規制にかかる国内法制の比較研究を、また櫻田さんは、チュラロンコン大学でプーミポン国王による地方行幸が、国民意識の形成に与えた影響について、歴史学の観点から研究を行っています。

お二人ともでの研究活動を行っていることから、タイの大学の事情、大学ランキングについてタイの大学の対策等、非常に貴重な情報を頂くことが出来ました。

加藤さん、櫻田さんとは元々京都大学バンコク事務所で実施されているタイ研究会（タイスクサー）でお目にかかり、その後当センターにお越し頂きました。

■Puthmthani 大学 Kanikar Sookasame 准教授の来訪（10月22日）

Kanikar 准教授は、山下センター長のユネスコ勤務時代の同僚である Dr. Namtip Asongkool の姉であり、今回の訪問はセンター長が対応しました。Kanikar 准教授は、NRCT が授与している最高賞（National Most Distinguished Research Award）を社会学の分野で受賞された方で、NRCT の社会科学分野における選考委員も兼ねておられます。今回のご訪問は、JSPS の事業について詳しく知りたいとのことでしたので、論文博士取得支援事業、二国間共同事業などについて説明したところ、関心を示され、広報頂けるとのことでした。



■カセサート大学で JSPS 説明会を開催（10月22日）



今回の事業説明会には約 60 名の参加があり、JSPS バンコク研究連絡センターが事業を紹介するのみならず、タイ国における JSPS 対応機関であるタイ学術会議（NRCT）の Tiwa Ngaowichit 国際連携課長から論文博士取得支援プログラムやその他 NRCT 事業紹介、また JSPS タイ同窓会長である Busaba Yongsmith カセサート大学理学部教授にもご自身の論博プログラムでの博士号取得にかかる経験について講演いただきました。

タイの研究拠点大学の一つであるカセサート大学で NRCT やタイ同窓会との協力の下、事業説明会を実施できたことは大きな意義があります。

当センター単独で実施するよりも、タイ国のファンディングエージェンシーである NRCT や、同窓会会長からタイ語での説明を行って頂いたことで、参加者の理解もより深まったと言えます。

カセサート大学の Poonpipope Kasemsap 国際交流担当副学長からは、こういった事業説明会を定期的に行うよう依頼されました。当センターとしては、NRCT や JSPS 同窓生と協力関係を維持しながら、今後もタイ国内の大学で定期的な説明会を継続的に開催していく所存です。

■京都大学三嶋国際担当理事の来訪（10月24日）

京都大学は国際戦略を制定し、国際拠点の充実のために北米、欧州、東南アジアに拠点を作ることを計画しており、バンコクに京都大学の拠点を設置することを検討しています。

当センターからは京都大学より派遣されている副センター長が出席し、また関達治大阪大学バンコク教育研究連絡センター長に出席頂き、大阪大学の業務概要、また当地の事情をご説明頂いた上で、意見交換を行いました。今回の意見交換の中で一番の話題となっていたのはミッションの設定であり、それぞれの大学の事務所によってミッションは当然異なってくるものであること、そしてミッションを明確にすることの重要性について議論されました。



■京都大学バンコク連絡事務所 横山教授、中西准教授の来訪（11月4日）



【左から中西准教授、横山教授、センター長、副センター長、関阪大センター長】

横山教授は元々名古屋大学大学院環境学研究科のご所属で、京都大学客員教授として2013年8月から10月までバンコク連絡事務所の駐在員をされていました。11月より、中西准教授が着任され、来年4月まで駐在される予定です。中西准教授の専門は、ミャンマーの政治体制とすることで、今後ミャンマーの情報収集に力を入れていく予定である当センターとしても、今回のネットワークを大事にしたいところです。

京都大学はバンコクにオフィスを設置することを検討しており、当センターとしても、京都大学との連携を密に推進していく所存です。

■ネパール・Pokhara 大学 Indra Tiwari 教授来訪（11月4日）

Tiwari 教授は過去にAIT（アジア工科大学院大学 Asian Institute of Technology）で教職についておられたほか、JSPS 外国人特別研究員事業により2001年から2003年まで東京工業大学に滞在しておられました。また、2012年2月3日に開催した論文博士号取得者へのメダル授与式および同窓会総会にもご参加いただくとともに、2012年4月12日にも当センターに訪問頂いています。

現在ネパールにはかなりの数の JSPS 同窓生があり、JSPS フェローの受け入れを中心に日本との長期間の共同研究実績があり、これを一層推進していきたいとのことで、JSPS とネパールの対応機関との学術交流協定（MOU）の締結、同窓会の設立について、議論を行いました。

当センターからは、基本的には JSPS 本部が行った説明の繰り返しになりましたが、MOU の締結及び同窓会の設立について、まずは自主的なシンポジウムやセミナーを開催して、両国の連携実績を高めていく必要があること。その上で、同窓会も自主的に組織して活動を続けていくことの必要性について説明しました。



■在タイ日本大使館主催コンケン大学日本留学説明会に参加、コンケン大学を表敬訪問及び JSPS 説明会を実施（11 月 7 日）



在タイ日本大使館が主催する地方留学説明会は年に四大学で実施されており、JSPS としては昨年より本格的に参加しています。

始めに齊藤貢在タイ日本大使館公使を代表とし、コンケン大学を表敬訪問し、Thawalwong Ratanasiri 国際交流担当副学長を代表団との会談を実施しました。今回の日本留学フェアは 14 回目の開催となります。コンケン大学の Kittichai Triratanasirichai 学長は、新潟大学工学研究科で博士号を取得されており、またコンケン大学は部局間学術交流を含め

54 の学術交流協定を締結しています。弘前大学がリエゾンオフィスを持っているとのことで、日本との繋がりを強力に推進しています。

表敬訪問では、参加者全員の自己紹介の後、それぞれの事業紹介が行われ、当センターからもセンター事業の説明を行いました。参加しているメンバーが研究者中心ということもあり、大きな関心が寄せられました。

表敬訪問の後、JSPS の事業説明会を実施しました。Thawalwong 副学長の挨拶で、「今回の JSPS の事業の紹介で、コンケン大学の研究者に情報提供の良い機会となったこと、またこのセミナーを通じて日本及び JSPS 及び日本との関係をより深めて欲しい」と挨拶しました。JSPS からは、センター長が JSPS の概要説明を、また副センター長が国際連携プログラムについて説明を行いました。



また、JSPS 論文博士取得支援事業で論文博士を取得された医学部の Kittisak Sawanyawisuth 助教、人文社会学部の Sukanya Aimimtham 准教授から日本での研究の経験談について、発表頂きました。申請の方法や自身の研究計画等の具体的な情報提供を行いました。

最後に、教育学部長でタイ東北部元留学生会長の Maitree Inprasitha 准教授より、閉会の挨拶が行われ、Maitree 会長は筑波大学で博士号を取得され、日本語での挨拶で、「日本との交流を行うことで、単に研究だけではなくそれ以上のものが得られるので、是非積極的に本プログラムに申請して欲しい」と挨拶されました。



コンケン大学は、タイ東北部を代表する研究大学ということもあり、参加された研究者は熱心に質問をされ、是非 JSPS 事業に応募したいという声もありました。また、Maitree 元日本留学生会長の積極的な支援も得られ、最終的には 35 名の参加者がありました。

コンケン大学は、日本との結びつきも強く、今後も大使館の留学説明会に参加し、大使館、JASSO、元留学生会との結びつきを強めつつ、JSPS の事業の紹介を積極的に展開していく所存です。

■NRCT-JSPS Joint International Seminar on Coastal Marine Science in South East Asia へ出席 (11 月 15 日～16 日)

タイ・チェンマイで開催された標記セミナーへセンター長が出席しました。今回のセミナーは、東京大学大気海洋研究所が受託している JSPS アジア研究教育拠点事業の一環として実施される NRCT-JSPS Joint International Seminar において資金提供団体としての挨拶依頼が東大よりあり、それを受けて JSPS を代表しアジア研究教育拠点事業に出席すること、セミナーに参加の ASEAN 諸国（ベトナム、マレーシア、フィリピン、インドネシア、タイ、日本）の研究者との交流を通して、各国の学術・研究情報を入手することが目的となりました。



セミナーの少し前にフィリピンを襲い、多大の被害をもたらしたスーパー台風も、地球の気候変動が原因の一つとも言われていますが、この Asian Core Program は、まさにそれについての研究、調査が主なもので、参加者からも、その重要性を鑑みて、5 年の支援期間が終わっても、何らかの形で JSPS の支援を要請されました。

■シーナカリンウィロート大学 (SWU) ウォラパン国際交流担当副学長を訪問 (11 月 18 日)



【左からセンター長、ウォラパン副学長、明治大学江藤教授】

明治大学江藤賢一教授のご紹介を受け、山下センター長がシーナカリンウィロート大学 (SWU) を訪問し、ウォラパン副学長 (国際交流担当) と会見しました。JSPS の実施している二国間共同事業、外国人特別研究員、論博事業などを説明し、早い時期に SWU で JSPS ガイダンスセミナーを開催すること提案したところ、即座に研究担当副学長に伝えるとのことでした。30 代半ばで、博士号取得を志したウォラパン副学長は、同大学の若手教員 (講師レベルなど) が論博制度を活用し、博士号を取得するよう奨励したいとのことでした。

■東京工業大学タイ拠点長 森村浩明教授の来訪 (11 月 18 日)

東京工業大学 森村浩明・特任教授がご来訪され、山下センター長が JASSO の山本所長と一緒に対応しました。森村教授は、2013 年 4 月に同大学のタイ拠点長に任命されたこと、NSDA の中にタイ事務所を設置していること、今後タイの大学や財団などとの間で国際連携を進める予定で、JASSO や JSPS と恒常的に情報交流したいとのことでした。民間企業から大学に移られた経歴をお持ちで、大学改革は、外部からの人材が率先するという意気込みを感じる話合いです。



【左からセンター長、森村教授、JASSO 山本所長】

■北海道大学国際本部国際支援課亀井プログラムコーディネーターの来訪（11月19日）



【左から副センター長、亀井コーディネーター、センター長】

亀井コーディネーターは、北海道大学が推進する特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」を担当されています。本プログラムは、学部教育と並行して実施される特別教育プログラムであり、海外留学、英語による国際交流科目の受講、フィールド型演習を通じて、最終的にグローバル社会で活躍出来るリーダーの育成を目指しています。

今回のタイ訪問は、2014年3月にカセサート大学で実施される予定のインターンシップ研修の準備のために来訪された際、JSPSにも表敬訪問いただいたものです。

■広島大学 上（うえ）平和・国際担当副学長の来訪（11月25日）

広島大学は、平成25年度大学の世界展開力強化事業（AIMSプログラム）に採択され、「アジアの共同経済発展と信頼関係の確立による平和構築に貢献する中核人財教育プログラム」を実施します。

本プログラムでは、現在大学院生レベルで実施している現地でのインターンシップを拡大し、学部学生をプログラム参加校に派遣・受け入れを実施します。現地日本企業の調査やインターンシップを含む国際キャリア教育といった高付加価値、魅力的な教育プログラムを提供し、最終的に英語一貫型の全学的教育プログラムへの発展と統合を目指します。また、タイでの広島大学同窓会の設立のための準備会議を開催しましたとのことでした。



【左から副センター長、上副学長、センター長、平野主査】

■大阪大学工学研究科の来訪（12月2日）



今回の訪問では、大阪大学より関達治大阪大学バンコク教育研究連絡センター長、大学院工学研究科生物工学国際交流センター藤山和仁教授、向井弘志大学院工学研究科教務課長、大学院工学研究科職員の植田真理さん、河村真貴さん、藤田玲子さんが当センターを訪問されました。大阪大学大学院工学研究科の留学生のプログラムの検討のため、タイに来訪されたとのこと、マヒドン大学、キングモンクット工科大学トンブリを訪問の後、JSPSを表敬訪問されました。打ち合わせでは、日本学生支援機構（JASSO）の山本所長を交え、留学プログラム及びJASSOとJSPSの連携、また研究者の支援に関する打ち合わせを実施しました。

■JSPS フィリピン同窓会（JAAP）設立総会及び記念シンポジウムへの出席（11月22日）

フィリピン・マニラ市内のデ・ラサール大学（De La Salle University Manila）で JSPS フィリピン同窓会（JAAP）設立記念シンポジウム “Enhanced Productivity through Science and Technology” を開催しました。

JSPS フィリピン同窓会は、元々フィリピン論博同窓会として2005年7月に発足しました。その後論博以外の JSPS プログラム経験者も加え、組織の名称も PRF から JAAP（フィリピン JSPS 同窓会）に変更しました。2013 年 4 月に当センターも参加して設立準備総会を行い、役員の任命、政府への登録、そして JSPS 本部への正式な登録書類の申請をへて承認され、JSPS の第 13 番目の公式同窓会として発足することになりました。



設立記念シンポジウムでは、まずは未曾有の大災害となった台風ヨランダ（30 号）の被災者に対する黙祷が捧げられ、その後国歌斉唱が行われました。その後は Dr. John Addy S. Garcia デ・ラサール大学教育学部長、加藤久 JSPS 国際事業部長、古館誠機在フィリピン大使館一等書記官、Prof. Fortunato T. Dela Pena DOST 次官が祝辞を述べました。続いて、Dr. Maricar S. Prudente JSPS フィリピン同窓会長からこれまでの JAAP の歴史と活動概要の説明がありました。論博同窓会からスタートした JAAP は、フェローシップ会議や DOST の支援と協力を受けてアウトリーチフォーラムやセミナーを実施してきました。

【講演される上杉教授】

基調講演では京都大学物質・細胞統合システム拠点（iCeMS）・化学研究所の上杉志成教授に「Three Experiments for Changing Japanese Universities」をタイトルとして実施いただきました。日本の大学を変革する三つの実験的な事業の紹介の後、上杉教授自身の代表的な研究についての説明が行われ、化学物質を利用した細胞の分化、そしてその治療への活用についての講演が行われました。上杉教授の講演は時として会場を和ませ、時としては熱心に聞き入らせるなど、聴衆を魅了しました。

午後からは、学術セミナーで二つの講演が行われ、最初に農業をテーマとして国連食糧農業機関（FAO）フィリピン事務所 Dr. Eulito U. Bautista による「Enhanced Agricultural Productivity through Science and Technology」、次にフィリピン大学ディリマン校（UP Diliman）の Dr. Iris Ann G. Martinez 准教授による「The Need of the Philippines for an Integrative Approach towards a Sustainable and Flexible manufacturing Industry」が実施され、参加者からの熱心な質疑応答が行われました。

引き続いて、JSPS フィリピン同窓会総会が実施され、フィリピンの各地方の代表も交えて定期的な JAAP 理事会を実施し、今後年次総会の予定や活動について議論を進めていく予定です。また JSPS 本部より、外国人研究者再招へい事業（BRIDGE Fellowship Program）について説明を行い、今後フィリピン同窓会に 1 名の枠が付与されること、バンコクセンター長が選考委員に名を連ねることが確認されました。



■竹内渉 東京大学生産研准教授・前バンコクセンターセンター長の来訪（12月4日）



竹内前センター長は、ハノイで行われた第20回アジア・太平洋地域宇宙機関会議（APRSAF-20）に出席された後、アジア工科大学院（AIT）での講義を行うためにバンコクに立ち寄られました。

今回の訪問では、バンコクセンターの担当地域であるミャンマー、ベトナムの事情について、東京大学の共同研究にかかる情報交換を実施するとともに、竹内前センター長の実施している衛星を使った気候変動予測に関する研究内容について説明頂きました。

竹内前センター長の活動は相変わらず精力的で、今後の当センターの活動範囲や活動内容を広げていくにあたって様々なアイデアを提供していただきました。

■2013年度第4回タイ学術会議（NRCT）訪問（12月12日）

2013年度4回目となった今回の打ち合わせでは、2014年にキングモンクット工科大学トンブリ及びプリンスオブソクラ大学で実施予定のJSPS事業説明会への協力要請を行うとともに、2014年2月22日にJSPSタイ同窓会と実施するセミナーについての共催及び協力依頼を行いました。セミナーについては、NRCTは共催について合意し、また夕食会を主催することとなりました。

特に今年度に入ってから、JSPSの事業説明会に対する協力等、NRCTとの連携・協力体制も一層深まっています。



■明治大学江藤教授による講義の開催（12月17日）



2013年12月17日、当センター会議室にて、明治大学江藤教授による講義「泰の民主化と現在、抱える課題」を実施しました。

本企画は、現在タイ国内で起こっているデモや政治的な衝突について、タイ政治の専門家である江藤先生からは是非お話を伺うべく、センターにて企画したものです。あくまで小規模なワークショップを希望されていたため、参加者を絞り、センター長、副センター長、JASSO 山本所長、JNTO 奥津次長、明治大学からシーナカリンウィロート大学に留学中の寺尾さん、五十嵐さんの7名で実施しました。

今回の講義では、これまでの歴史を含む「タイ式の民主主義」を中心に、かなり切れ込んだ視点で、この国の制度上の問題、求められていることについて講義頂きました。参加者も、タイの政治体制について非常に興味を持っているため、質疑応答や意見交換を繰り返し行いながら、大変盛会となりました。

■中国・広州で実施の NSFC-CAS-JSPS シンポジウム、JSPS 中国同窓会総会及び記念シンポジウムへ Busaba Yongsmith JSPS タイ同窓会長と出席（12月6日～7日）

12月6日、中国・広州市の中山大学で開催されたシンポジウム「NSFC-CAS-JSPS International Workshop on Frontier of Science and Technology 2013」にセンター長、副センター長、Busaba Yongsmith JSPS タイ同窓会長で出席しました。

本プログラムは、日本学術振興会（JSPS）、中国国家自然科学基金委員会（NSFC）、中国科学院（CAS）の共催で実施されたもので、“Novel Approaches to Difficult Diseases”, “New Horizon of Biomedical Researches”, “Physical Link of Planets, Waves and Materials ”, “Exploration of Electromagnetic World”といった様々なテーマについて、日本から5名、中国から7名の研究者に講演いただいたものです。会場では、中山大学の若手研究者及び学生によるポスターセッションも実施され、50名程度の参加者とともに、積極的に意見交換が実施されました。



JSPS 中国同窓会 2013 年理事会・年会 2013.12.7 广州



明くる日の12月7日、広州市内にある広東省生態環境と土壤研究所で開催された JSPS 中国同窓会総会に出席しました。

午前中は、非公開の理事会の後、総会が開催されました。総会では、加藤久 JSPS 国際事業部長、余翔中国同窓会長の挨拶の後、Busaba Yongsmith JSPS タイ同窓会長がタイ同窓会について講演を行い、これまでのタイ同窓会の活動について開催したセミナー等を中心に紹介を行いました。

その後、中国同窓会総会が実施され、次期会長候補者の選出、活動報告、Bridge プログラムの選考結果、今後の活動について報告がありました。

続けて午後からはシンポジウムが実施され、茅野充男東京大学・秋田県立大学名誉教授による講演「Phytoremediation of Cd contaminated arable soil in Japan」、また陳能場中国同窓会広東支部長（広東省生態環境と土壤研究所・研究員）による講演「土壤汚染と食品安全」が実施されました。その後、加藤部長による JSPS 国際交流事業の紹介、Bridge プログラム参加者5名による報告会が行われました。

今回のタイ同窓会長の中国同窓会総会の参加については、アジア地区の同窓会交流のために実現したものであり、今年2月に実施された JSPS タイ同窓会総会及び論博メダル授与式に余翔中国同窓会会長を招へいし、今回は逆に Busaba タイ同窓会会長が中国同窓会総会に参加しました。同窓会活動を通じて、今後日本・中国・タイの学術交流が推進されることが期待されます。



【余中国同窓会会長から記念品を授与される Busaba 会長】

■第12回 JSPS タイ同窓会理事会の実施（12月19日）



参加された研究者も入会資格があることが確認されました。

今回の理事会は、バンコク市内におけるデモの実施により、会場をカセサート大学に移して行われました。

今回の理事会では、Busaba 同窓会長より12月7日に中国・広州で実施された JSPS 中国同窓会総会への参加について報告がありました。また、JSPS タイ同窓会総会の実施について議論されました。

その他、2014年度の Bridge Fellowship プログラムの審査基準、募集基準についても確認され、基本的には今年度と同様のものとする、タイ同窓会の入会資格について、JSPS のプログラム、Asian Core プログラムや二国間交流事業に

■電気通信大学の来訪（12月20日）

今回電気通信大学は、キングモンクット工科大学トンブリ校（KMUTT）構内に、東南アジア地域の拠点としてアセアンリサーチセンターを設置することとなり、2014年2月7日に記念シンポジウム及び式典を実施のため、当センターへの協力依頼があったものです。

電通大は、平成25年度文部科学省「研究大学強化促進事業」において、全大学の中から19大学選定された「研究大学」に採択され、研究力強化のため、特に国際化の強化方針では、海外拠点を展開し、留学生の獲得、現地大学や企業との共同研究をコーディネートし、本学から派遣学生及び研究者を支援することを掲げています。今回のアセアンリサーチセンターの設置により、国際化の実現を目指しています。



【左からセンター長、田浦国際交流センター副センター長、金澤総務課長、JASSO 山本所長】

■北海道大学水産科学研究院の来訪（12月24日）



北海道大学水産科学研究院では、海外拠点の設置を計画しています。現在北海道大学全体で海外拠点の設置を推進しているところであり、海外のトップ教育研究拠点から研究者を招へいして、国際交流を推進することを目指しています。現状は、研究開発の面で、シンガポールに拠点を設置することを検討しているとのことでした。

北大水産科学研究院は2015年3月まで JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東南アジア海洋圏における持続可能性水産科学のための研究教育ネットワークの構築」を実施していますが、本プロジェクト終了を見据えて、JSPS 二国間交流事業、研究拠点形成事業への申請も視野に入れるとのことでした。

＜番外編＞山下センター長が研究調査の一環でユネスコ本部（パリ）を訪問した機会に合わせ、ロンドンとストラスブールの両センターを表敬訪問しました。

■ロンドンセンター主催「出発前オリエンテーション」と JSPS 英国同窓会懇親会（10月25日）



平松ロンドンセンター長のお招きを受け、長・短期招へい、外特などの対象者向けの「出発前オリエンテーション」と JSPS 英国同窓会の懇親会に参加し、バンコクセンターの活動についてご紹介しました。オリエンテーションのプログラムには、日本での生活や研究のガイダンスに加えて、同窓会の紹介もありました。帰国後に同窓会メンバーになってもらうという狙いもあり、同窓会と共催で実施しているところなど学ぶことも多く、今後タイ同窓会と相談しながら、バンコクでも実施したいと思いました。

■ストラスブールセンター訪問（10月28日）

ストラスブールでの1泊2日の滞在中、中谷センター長がずっとお付き合いくださいました。

センターの活動紹介、ストラスブール大学キャンパスや市内の主だった歴史的建造物の視察など大変お世話になりました。センター開設以来10数年間センター長としてのご苦労話をお聞きして大いに参考になりました。中国同窓会総会（10ページ参照）で基調講演された茅野充男・東京大学名誉教授（表紙写真の右端）が中谷先生と大学でのクラスメートというのが後で分かりました。JSPSを通して自分の人脈が広がっていく幸せを噛みしめています。



■副センター長によるロンドンセンター及びストラスブールセンター訪問（10月）

センター長訪問前に、夏期休暇を利用して副センター長もロンドンとストラスブールセンターを訪問し、ロンドンでは松本副センター長及び協力員の皆さんと、ストラスブールでは中谷センター長、久田副センター長、協力員の小川さんとお会いして、意見交換を行いました。



【左はバンコク副センター長主催フットボール観戦ツアー、右はストラスブールセンターの皆さんと】



広州探索三時間



我々のフィールドは東南アジアが中心であるが、今回は少し毛色を変えて広州（中国）を紹介する。といっても、バンコクからは僅かに 2 時間 40 分。ジャカルタやマニラに行くよりも近いぐらいだ。改めてバンコクからの距離の近さを感じる。

中国同窓会総会に出席するために、中国・広州を訪問した。前回広州を訪れたのは今から 20 年近く前のことで、大阪港から 3 日かけてフェリーで上海に渡り、そのまま鉄道で 3 日かけて広州まで南下、そして 3 等席の夜行フェリーで寒さに凍えそうになりながら香港に渡ったのは懐かしい思い出だ。1994 年 1 月の広州は、どんよりと曇った空の下、街はまだまだくすんでいて、広州駅前の「統一祖国 中華振興」のスローガンがひたすら目立っていた。香港マカオは返還前最後の資本主義の輝きを放っていた。それから 20 年、「統一祖国」はまだ残っているが、街には近代的な地下鉄が張り巡らされ、外資系の店が立ち並び、全く異なる様相を見せていた。20 年前の僕にここが香港だと伝えたら、きっと信じてしまっただろう。



それでもかつて行った広州の名刹・光孝寺は相変わらず人で賑わい、広州駅前のスローガンはそのままだ。光孝寺は三国時代の呉の武将、虞翻の元邸宅がお寺になったのだが 20 年前と同じく、虞翻はバランス取れた能力値と占卜、なんてことをここでは言うまい。

以前は訪問しなかった陳氏書院（陳氏代々の廟で清朝時代末期の 1890 年頃に建てられた建築物）も非常に趣のある建物だった。

中国同窓会の先生が日本語で発表される姿を見て、日本と中国の関係はまだ難しい状況にあるけれども、それでも学術交流から関係が修復し、良好な関係が維持されていくことを心より望みたい。

【写真上から広州駅前、光孝寺門、光孝寺境内、写真右下は陳氏書院】



ブアさんのタイご案内

6 / 2014



私の名前をカタカナにすれば「ブアブチャーマニー・リットアイソン」です。何て呼んだらよいのでしょうか？

タイ人もみんな本名なんか呼びません。みんな短いニックネームを持っていて、小さいころからニックネームで呼ばれます。私達も彼女たちの本名は知らずにニックネームしか知らないことが多いです。私は親しい友人からは「ミオ」というニックネームで呼ばれます。猫みたくいつも「meow」・「ミオ」とつい口癖で言うてしまうからです。私が本当は犬派なのは内緒です。!!!!☺

わたしの本名のブアブチャーマニーの名前は長くて分かりにくいから、タイ人の知り合いからは短い名前の「ブア」で呼ばれたりして、私のニックネームはブアだと思っている人が多いです。タイの人は戸籍に名前を登録する際に前に登録がある姓だとあとに何か文字をくっつけるそうです。そうすると後から登録する人は更に長くなります。私の知り合いに TAMMANITTAYANGKUL (タムマニッタヤンクン) という人がいます。苗字が長いから「T」ひとつ短くしようと思いますって、たいして変わらないでしょ!! ちなみに苗字変えちゃう人ってけっこういるみたいです。仕事で電話しても苗字が変わっていてそんな人はいないと言われることもあります。昔タイでは苗字がなく、苗字にあまりこだわらないそうです。フォーマルな場でも、普通は苗字ではなくて名前呼びますよ。苗字を使うことはあまりありません。日本とはとても違いますね。

※ブアさんのタイご案内は、バンコクセンター現地スタッフの Ms. Buabuchamanee Ritthaisong (通称ブア) さんによるものです。



仏王都動乱



バンコク閉鎖が反政府勢力によって 2014 年 1 月 13 日に開始されてから一週間が経過した。バンコクの反政府勢力とデモについては、様々なところで様々なことが書かれているので、専門家ではない僕はここには言及しない。状況は刻一刻と変化しているが、1 月 22 日現在、バンコクに在住している一外国人の視点から、バンコクの生の現状を報告したい。

今でもバンコク都内 7 ヶ所の交差点を反政府勢力が封鎖しており、当センター近くのアソーク交差点も占拠され、デモ隊の声と音楽が今もけたたましく響いてくる。反政府勢力のデモに対する爆発事件が発生し、22 日には遂に非常事態宣言が発令された。それでも人々の生活はそれほど変わっていないように見える。



バンコク閉鎖作戦が始まった 13 日、アソーク交差点では人で溢れかえっていて、交通は完全に遮断されていた。とはいえ反政府勢力は空港を含めた公共交通機関までは封鎖しないことを明言し、バンコク市内の鉄道や地下鉄は通常営業だった。人混みをかき分けてオフィスに向かったものの、特に外国人に危害を加える訳ではない。しかし驚くことにいつの間にか設置されたのか、大通りに一晩で大きな屋根付きのアーケードがかけられ、交差点にはステージとモニター、スピーカが設置されていた。さながら野外フェス会場だ。また参加者は意外にのんびりしている。日本のデモに見られるような切迫感がない。しかし人々は意外に秩序だって行動しており、野外トイレも設置され、物売りが並び、民間の救急班も待機し、そして食糧も配られていた。

それから一週間、デモの様子を覗いてみるが、一日ごとに明らかに減っていて、21 日はほとんど人がいない。人々には仕事があり、いつまでもずっとデモに参加出来るはずもない。封鎖が続けば続くほど自分たちのクビを締める結果になる。

この国の民主主義はどうなっているのか、なぜ公共の場の占拠がこの国では許されるのか。日本だったら警察や機動隊が排除するだろう。市民の安全を守るために。タイの軍や警察は中立とのことだが、シビリアン・コントロールはこの国にはないのだろうか。しかし、タイにはタイの事情があり、外国人がタイの事情を理解せずに上から目線で正義を振りかざしても、それは所詮我々の正義でしかない。

少なくとも、この動乱のバンコクにいて、愛すべきタイ王国がこれからどうなっていくかを見守りたいと思う。



【写真左上からアソーク交差点(13 日)、一晩で出現したアーケード(13 日)、ステージ(15 日)、人がなくなったアソーク交差点(20 日)】

■タイ高等教育開発について

Chaturon Chaisaeng タイ教育大臣は、第 8 回高等教育開発会議をタイ大学理事協議会と共催し、議論結果は下記の通りである。

- ・大学のコーポレート・ガバナンスについて
教育改革政策は、大学の国内の需要を満たすための高度な人材育成を支援することを目的としている。しかし、高等教育制度の運営のために障壁となるものがある。タイ高等教育局は、大学の独立と質を保証するために高等教育法を定め、コーポレート・ガバナンスにかかる問題を解決するよう試みる。

- ・教職員の給料について
大学は政府機関であるため、給与体系は元々他の政府職員より高く設定されていた。しかし、近年大学教職員給与は低くなってきており、大学の教職員給料体系は初等中等教育の教員給与体系とは異なっているにもかかわらず、しばしば低い水準となっている。

本件は大きな問題とされており、解決法を模索するとともに、高等教育機関公務員人事委員会でさらに議論される予定である。教育大臣は高等教育局に本件の情報収集を命じるとともに、財務副大臣との議論を実施する。

- ・高等教育機関における入試制度について
入試制度の問題と改善について、タイ大学理事協議会から提議された。現在の入試制度は不公平性を生じさせ、学校教育に深刻な影響を与えている。タイ大学理事協議会は、本件を改善すべき事項として認識している。

- ・大学の質評価
大学の質評価及びランク付けについて詳細を議論する必要がある。タイ国内の大学のランク付けをする試みが以前あったものの、多くの批判があり継続していない。現在使用されている質保証制度は実際の教育の質を評価出来ておらず、事務作業を増加させているだけである。また、各大学は高等教育委員会や、公的機関委員会によって第三者評価を受けるべきである。そのために、効率的に大学の質を評価する標準的手段が必要であり、また教育省による大学ランキング構想に統合されるべきである。
他に、専門的な問題、大学評価の開示方法、研究、出版、教育管理等また大学ランキングのグループ分けといった、検討課題が残っている。

(10 月 9 日 タイ教育省)

■中国人による ASEAN 言語学習者の増加

中国人大学生で東南アジア諸国の言語学習者が増加している。特にタイ語は、英語等の主流から離れた外国語の中では、中国の若者の間では最も人気がある。

中国と東南アジア諸国間の連携が強固になるに連れ、東南アジア諸国言語の習得者は卒業後により多くの収入を得る機会が増加する。多くは中国でビジネスをする東南アジア企業だけでなく、中国の官公庁や民間企業に雇用されている。

東南アジアは貿易の増加やアジア新興地域の観光業といった点で中国にとっての重要性が増している。中国商業省によると ASEAN は中国にとって欧米に次いで三番目に大きい貿易相手国である。8,300 万人に上る中国人海外旅行者の内、ASEAN を来訪したのは 10%以上に上る。

雲南省の州都である昆明市郊外にある雲南民族大学は東南アジア言語及び文化コースを提供している高等教育機関の一つである。雲南民族大学の東南アジア・南アジア言語文化学部は、雲南省だけでなく中国全土から 1,265 名の学生を集めている。1993 年よりタイとビルマのコースを、それから 3 年後にベトナムのコースを開講した。当学部は 1997 年に開設され、現在はさらにラオス、カンボジア、マレーシア、インドネシア語の言語も教えている。昨年は 1,200 名以上の学生が当学部を卒業し、卒業生の多くはタイ、ビルマ、ベトナム語を専攻していた。96%の学生が中国のメディア、国営企業、大学、民間企業に就職する。

全ての学生は 3 年生で雲南民族大学との提携校に留学することが義務づけられており、タイはチェンマイ大学、プラパ大学、ラチャパットペッチャブリー大学、ラチャパットウツララディット大学の 4 校と提携している。

(10 月 27 日 Nation 紙)

■欧州連合との連携—タイの高等教育の国際化のために

タイ高等教育委員会は駐タイ欧州連合代表部と協力して会議を開催し、EU の事例、またタイのこれまでの経験を元に国際化政策及び戦略を議論した。Jesus Miguel Sanz 駐タイ欧州連合代表部大使は、タイ EU 間での高等教育における緊密な二国間連携について強調した。特にエラスムス・ムンドゥス計画と現在新しい段階に入った政策的な枠組みである政策対話支援機関 (PDSF) について、高等教育分野において継続的な支援が行われているが、欧州連合は EU-SHARE Program を 2014 年から開始することによって、学生流動化と質保証をタイ欧州両地域で支援する。

Tossaporn Sirisampun タイ高等教育委員会事務局長は、以下のように述べた。高等教育委員会の政策は、外国と連携し、高等教育において単位互換とインターナショナルコースによる学生交流を推進させる、これによりタイの高等教育の国際化の重要なメカニズムとなるだろう。現在はタイ国内では 20,000 名の留学生が滞在し、1,000 以上のインターナショナルコースが設置されているが、タイの高等教育制度は国内外に適応した水準に押し上げられなければならない。また、それぞれの高等教育機関は、長所を活かした戦略を立てなければならない。欧州の留学経験はタイの高等教育水準を強化させるのみならず、ASEAN 共同体内におけるタイの高等教育に関する認知度を向上させることが出来るだろう。

その他様々な意見交換が実施され、国際的な教員と学生の交流を推進することにより、タイのアイデンティティを残しつつも国際的な雰囲気醸成の必要性、学生のパフォーマンス、とりわけ火急の育成が求められている英語能力の向上にかかる重要についても議論された。加えて、欧州連合はタイの高等教育国際化の推進政策として、強固なネットワークを構築することに関心を持っており、このことは、タイの高等教育の国際化がタイと ASEAN 諸国における人材育成の実質基準の策定について言及した本会議の参加者全体に影響を与える結果となった。教員と学生の交流プログラムは、学術交流ネットワーク拡大とバランスのとれた学生及び教員の流動推進の核となるだろう。本会議は、「国際化、ガバナンス、高等教育構造の改革」の一部として、タイ EU 間の協力枠組みで実施され、大学の国際交流担当副学長及び国際機関が参加した。

(11 月 12 日 タイ教育省)

■タイ高等教育委員会、専門的知識を有する博士研究者の創出を推進

タイ高等教育委員会は教員、研究者の専門性、研究競争力を強化し、博士研究者の数を増加させることにより、高等教育機関の質向上を図る。Dr. Khunying Sumontha Promboon タイ高等教育委員長は既に承認された「高等教育研究ネットワーク」の提案書を明らかにした。本案件は、タイ高等教育局とタイ研究基金 (TRF) の協力で実施されるものであり、2015 年～2024 年度まで 10 年間継続し、2,805 百万バーツをかけて 850 名の博士課程学生を創出する。

本プロジェクトは教育大臣によって既に承認済みであり、高等教育機関における人材の可能性を高めるためのプロジェクトを含めた事業計画を内閣に提出し、今後更に検討される予定である。本事業 “National Higher Education Research Network” は博士課程学生の創出に重点的に取り組むだけでなく、Royal Golden Jubilee Ph.D. Program の政策委員会による専門知識に基づいて、

高等教育機関支援及びネットワークの形成についても実施する予定である。

(11 月 12 日 タイ教育省)

■職業訓練教育の改革

職業訓練教育の改革について、タイ教育省による新しい改革モデルが浮上した。教育は生産性向上のための人的資本開発の鍵となると、タイ開発研究所 (TDRI) の報告書は述べている。

報告書の著者の一人である Pokpong Junvith 氏は TDRI の学術セミナーで、以下のように述べた。教育改革は 4 つの分野を重点的に取り組むべきである。即ち人材強化、高品質の代替手段の創成、政策決定のための整備されたデータベースの作成、全てのステークホルダーの参加である。特に、教育部門は人々の能力と生産性を向上させなければならないことを強調した。また、職業訓練教育が良い代替手段となっていないことが、国内の工場の需要を満たす技術を持った卒業生の不足の原因となっている。Chaturon Chaisang タイ教育大臣は、職業訓練教育学生を増加させる政策を推進しており、教育省は、職業訓練教育に関係する教員と教材開発のための予算を増加させるべきであると Pokpong 氏は提案した。タイ教育省は職業訓練学生一人あたり 25,000 バーツを配分しているが、高校レベルの中等教育には年間 28,000 バーツを配分している。

Pokpong 氏は、例えば税制優遇措置を取るなどして、企業が教育サービスにおいて大きな役割を果たすことが出来るようにするべきであると考えている。しかし一方で、職能団体の契約は企業に職業訓練学生の不正雇用防止を強く推奨している。また、教育省は教育制度における説明責任の付属について説明するべきであると述べている。また、教育している学生の成績が悪いにもかかわらず、高い評価を得ている教員がいることについて不満を述べた。保護者のフィードバックが教員に対して本当の影響を与えるようになるには非常に時間がかかる。それゆえに、教育省は教員の給与の一部を学生の国家試験の成績に準拠することにするべきであることを提案した。

Chaturon 教育大臣は、TDRI の提言は教育省の近年のアプローチと大きく変わらないと述べている。政府は、一般的な国家試験といった中央で実施する試験を強化する予定であり、教育省は PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) における国の教育水準向上に真剣に取り組む予定である。PISA 調査の結果は 12 月に公開され、タイは 65 ヶ国中 50 位となり、スコアは前回の結果より幾分向上したが、まだ向上の余地が残されている。

(11 月 19 日 Nation 紙)

■高等教育機関における学生入学試験指針

Chaturon Chaisaeng タイ教育大臣は、「タイ高等教育機関における学生入学指針」にかかる会議において下記のように統括した。

現在高等教育機関は下記入試制度を実施している。

- 1) 従来の入試制度
- 2) 直接入試制度・下記の三つの制度に分類
 1. タイ国内の全土に在住する学生
 2. 機関と同じ県内に在住する学生
 3. 機関と同じグループ、直接協力関係にあるグループで学んでいる学生
- 3) 定数制度
 1. 能力のある学生の割り当て
 2. 同じ学区に居住する学生への割り当て
 3. 専門分野の人材育成のための協力割り当て
 4. 奨学金割り当て

多様な入試制度は各機関にとって重荷となり、学生や保護者に時間と費用負担、また富裕層と貧困層の間での不公平性を生じさせる結果となった。今回の委員会の審議事項は、タイの高等教育機関における学生獲得の指針を基礎教育政策に基づいて検討することである。新しい仕組みは保護者と学生の負担と費用を軽減させる必要がある。本委員会では、内閣でさらに検討される新しい指針を策定する。

本委員会は、高等教育局長、初等教育局長、大学学長会議を含む 13 の委員から構成され、決議は以下の通りである。

1. 高等教育局は全ての国内の大学に対し、2014 年度の学生受け入れを実施していないか確認し、高校卒業を待って受験するようにする。もし既に受け入れを決定した大学があれば、その理由と必要性を明示する必要がある。
2. 直接入試を希望する大学があれば、即座に入学決定する制度を実施する必要がある、且つ試験は高校卒業後に実施する必要がある。
3. タイ国立教育試験機関、高等教育局、初等教育局は、様々な入試制度を考案する。Dr. Varaporn Seehanart 高等教育委員会次長は高等教育機関の入試指針開発にかかる少委員会委員長に任命され、学生、保護者、大学にとってふさわしい制度を開発する。

教育大臣は、結論として明快な入試システムの導入を決定した。新しい制度は学生の準備には影響しないよう、2~3 年以内にはアナウンスされる予定である。

(11 月 20 日 タイ教育省)

■マレーシアの若手医師の質低下の懸念

マレーシアの若手医師の質が懸念事項となっている。国内最大の医師会は海外の医学部について警鐘を鳴らし、専門家も水準の低い現地実習について警告している。

マレーシア医師会は、政府に対して国外の医学部について審査するように求めた。もし政府が必要とする水準を満たさなければ、政府の認証を取り下げるべきだと述べている。政府は 375 校の海外の医学部について把握している。これらの大学を卒業し、国家試験に合格した後にも、研修が必要となる。

この問題は海外の医学部だけではなく、国内の私立大学医学部についても該当する。長期間にわたって政府は国家の地位向上に奔走し、私立医学部の急速な増加に手を付けずにきた。現在は 780 人に 1 名の医師がいるが、今後 2015 年までには 600 名に 1 名、2020 年までには 400 名に 1 名の割合にすることが目標となる。

毎年 4,000 名の医学部卒業生がいるが、半分以上が私立もしくは海外の医科大学出身である。2015 年には、新規医師は 5,000 名になることが期待されている。

医学部卒業生が倍増しても、研修先が追いついていない。研修医は血液採取や縫合といった学校で取得すべきである基本的な技術すら取得していないのが現状である。

マラヤ大学といった 9 つの国立大学医学部は、一流の機関であり、高成績を獲得した学生しか受け入れない。しかし他の 30 校の私立の医学部は、低い水準で入学することが出来る。一度卒業してしまえば、研修先の病院が増大する研修医受け入れが困難である状況とともに、医師研修も妨げられる。現在卒業生は 2 年間必須の国立病院での研修のために 9 ヶ月も待機しなければならない状況である。この待機期間は年々長くなっている。

現在マレーシアでは研修先の病院は 44 カ所あるが、研修医と患者の割合が 1:3 であり、患者に対する研修医の割合が多い。シンガポールは 1:8、英国では 1:12 となっている。政府は研修医を軍病院で受け入れるだけでなく、さらに 2 カ所増やす予定にしているほか、地方の病院にも派遣するように試みている。しかしまだ十分ではなく、医師と医科大学の認可を規制する機関が必要である。マレーシア医師会では独自に私立の医学部に対して定期的な調査を実施し、免許を無効化している。しかし海外の大学を監視するのは難しい。

問題を認識した政府は、2010 年に新規私立医学部の開設認可を中止した。

2008 年に新しく開学した Quest International University in Perak は、128 名の学生が在籍しているが、学生を厳しく選抜し、少人数教育を実施している。医学部長である Dr Alam Sher Malik は述べる。「最終選考に残った候補者は心理学者も含めた研究者によって面接が行われる。」

(12 月 2 日 Nation 紙)

■Times Higher Education 紙・世界新興経済国 トップ 100 大学にタイから 5 校が選ばれる

5 校のタイの高等教育機関が Times Higher Education 紙の 22 ヶ国の新興経済国における大学教育ランキングにおいてトップ 100 校に選ばれた。選ばれたのは、29 位にキングモンクット工科大学トンプリ (KUMTT)、52 位にマヒドン大学、82 位にチェンマイ大学、85 位にチュラロンコン大学、89 位にプリンスオブソンクラ大学 の 5 校である。

本ランキングは、ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカの 5 ヶ国に加え、タイ、マレーシアなどの 17 ヶ国の中から選定され、世界大学ランキングでも使用された教育、研究、知的財産、国際性といった現代の大学に必要な側面を網羅した、13 の指標を厳格に評価して作成された。

Times Higher Education ランキングのエディターである Phil Baty 氏は以下のように述べる。5 大学のランク入りは教育の場としてタイのイメージ向上に繋がっている。経済の成長に連れ、政府が国際的に競争力の有る大学の重要性を認識することで、大学が一層発展する兆候が見られる。主要な国際的奨学金の仕組みや新しい研究や革新的な機関の開発、研究支援ビジネスの強化は前向きな一歩である。タイは上昇気流の中にあることが明白である。

2013-14 の世界大学ランキングでは、タイからはキングモンクット工科大学トンプリ (KMUTT) のみが 301-350 位にランクインし、他の 4 大学は圏外だった。

本ランキングでは、KMUTT は東南アジアでは最上位であり、またタイは同地域で比較すると上首尾の結果であったといえる。マレーシア以下では、マレーシア国立大学が 77 位、プトラ大学が 95 位である。インドネシアも新興国とは見なされているが、どの大学もこの新しいランキングに入っていない。新興国の中では、中国が最上位であり、トップ 10 に 4 校、トップ 100 に 23 校ランクインしている。北京大学は第一位となっている。

(12 月 9 日 Nation 紙)

■タイ高等教育機関公務員人事委員会の開催

2013 年 12 月 13 日にタイ高等教育委員会で高等教育機関国家公務員人事委員会会議が開催された。会議の要旨は下記の通りである。

1. 高等教育機関における国家公務員任用委員会 において労働年齢構造の検討

Prof. Tossaporn Sirisamphan タイ高等教育局 (OHEC) 事務局長は、1999 年に提案された政府人員の削減に関連して、高等教育機関における労働年齢構造の改革論議について述べた。

2013 年 3 月 31 日現在、政府機関、自治大学、教育大学、また工科大学を含めた高等教育機関で 32,547 名の公務員が、また 80,056 名の大学の教職員が従事している。25~30 年後、大学の教職員は全て公務員から身分を転換させる。多くの大学は既に自治を確立しており、将来的には公務員が高等教育機関からいなくなることも可能だろう。

OHEC は大学の教職員の雇用制度調査を実施し、大学の目的と役割に肯定的な影響を及ぼすかどうかを確認した。その上で、高等教育機関における公務員の人材役割を管理する小委員会に、最小限の許容範囲についても調査させた。これらの結果は各高等教育機関の承諾を得るため提示されるが、それに至るまでには多くの時間がかかる予定である。

2. 新たな高等教育機関グループの開発プロジェクトにかかる予算増加の承認

本会議では、原則として、52 の高等教育機関が新しい大学グループを形成するプロジェクトの開発に関する予算の増額配分を承認した。このグループは、40 の教育大学、工業大学、そして特別法によって設立された大学である。プロジェクトは 2015 年度から 2019 年度までの 5 年間であり、68,000 百万バーツが投入される。このプロジェクトの目的は、高等教育水準を見直し、学生に ASEAN 共同体に備えさせるためである。しかし、この法案は、内閣による検討が必要となる。

3. 電子ジャーナルによる研究結果の配布

本会議では、研究成果のオンライン電子ジャーナルによる配布の必要について述べられた。教員人事に関する小委員会では、本件は公務員人事委員会による規定には適合しないとされた。なぜならば、多くの研究プロジェクトはオンラインでアクセスや探すことが出来無い上、電子ジャーナルは正確な配布日が不明であるからである。

(12 月 17 日 タイ教育省)

日本学術振興会バンコク研究連絡センターの所在地



日本学術振興会バンコク研究連絡センター/JSPS Bangkok Office

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
tel +66-2-661-6533 fax +66-2-661-6535

Website: <http://jpsp-th.org> (現在メンテナンス中)

Email: jpspbkk@jpsp-th.org